

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週一日發行）
昭和二十四年四月二十八日逕報者特別掛承認第三五二號
昭和三十年六月二十五日印刷 昭和三十年七月一日發行

第二十一卷

七月號

淨土



七月號

寫眞訪問

如來來迎圖



藤原時代の作と思われる「如來來迎圖」が親鸞上人とゆかりの、新潟縣東頸城郡安塚村願教寺で發見されました。この來迎圖は幅四十センチ、長さ約一メートルの布に純金箔で描かれ、當時の技術の粋が盡されています。

浄土 七月號 目次

中村吉右衛門の事ども	吉田絃二郎 (1)
五如來さまを讃えまつる	佐藤良智 (10)
お盆を迎える度に	須藤隆仙 (12)
地獄と極樂の話	惠谷隆戒 (16)
母の新盆	寺内照子 (22)

宗教入門(3)	佐藤賢順 (4)
父と母を語る	内山憲尙 (25)
一箱のキャラメル	杉本信雄 (26)
童話 三ちゃんのふしぎ	山田巖雄 (20)
史話 もののふの権化	鶴田満泉 (28)

中村吉右衛門の事ども



吉田絃二郎

中村吉右衛門丈が逝かれてから、やがて一年という月日が経過しようとしています。

それについて、思い出すことも多いが、吉右衛門丈が信仰心の厚かったことなどについて少し書いて見たいと思います。

大地震の前のことでした。わたくしは大磯に安田鞆彦さんをお訪ねしました時、何かの話から「吉右衛門のため、西行法師を書いてやつて下さい。」と安田さんがいわれました。わたくしはさつそく「よろこんで西行法師を書きましよう。」とお答えしました。

その時わたくしは「いよいよ上演の時には、舞臺装置はあなたにしていたきたいですが。」とお頼みしましたら

「舞臺装置はわたくしが致します。」という御返事でした。

それから十幾年という時が経ちましたがわたくしの西

行法師は出來ず、安田さんに對しても申しわけなく思つていましたが、松竹から吉右衛門丈のために清正を書、ようにとの話があり、西行法師ではないが、ともかく吉右衛門丈のために戯曲を書くことになりましたので、十何年前の安田さんへの御約束も幾分果せるわけでもありよろこん、書き上げることになりました。

安田さんの舞臺裝置をいただくことができましたのでとても嬉しかつたことは御想像におまかせ致します。

いよいよ脚本が出來上がつて、最後の仕上げを、しなければならぬ時、わたくしは中國筋から九州は鹿児島まで講演旅行に行かねばならぬことになつていましたので汽車の中で脚本を読み直し、福岡の宿から、松竹に臺本を送りました。

福岡の次ぎの講演は熊本でしたが、わたくしは日暮れころから、熊本の郊外にある清正公の廟所に參詣して、御守りをいただいて吉右衛門丈に送ることになりましたが台風のところとて、俄かにものすごい嵐になり、日は暮れ

てしまい、道は遠く、困つたことがありました。その嵐のなかにただ一人水垢離を取つてゐる男がありました。

さていよいよ「二條城の清正」上演と決定しますと、そのころ吉右衛門丈は代々木に住んでおられましたが、その代々木の邸に、出演の俳優はいうに及ばず、囃子方、大道具、小道具、照明の人たちまで集めて、本讀みをされた力のこめ方といつたらありませんでした。

さつそく濱町の清正公さまにお詣りをなされましたが樂屋にも清正公の御影をまつり三十分くらい黙禱しておられました。濱町の清正公さまには上演中是一日も缺かさず、毎朝自分でお詣りをしておられましたが、芝の清正公さまにも、毎朝代參の人をやつておられました。

或る時、清正公が白い馬に乗つて來られたなどという話をされたことを、今は故人になられた川尻清潭先生が語つておられました。吉右衛門丈のあの熱誠をこめた信仰振りを見ては、「それは幻影。」「だ錯覺だ。」などといつて片付けてしまうことはできないと思われました。

明治のころ綱島梁川は神を見たと言明して、當時のジャーナリストたちに冷笑されたことがありました。が、「われ神を見たり」と語つた梁川の人格には今なお後光がさしているように思われます。

吉右衛門丈の言葉もあの人柄を知つてゐる者にとつては、深く考えさせられるものがあります。

清正を演ずる間ばかりではなく、樂屋にいても、奈落を通る時も、吉右衛門という人は神佛とともに在り、自分自身が清正公に成り切つていました。

村田嘉久子さんが或る時「二條城の清正」上演中に、吉右衛門丈の樂屋を訪ねたおりの経験を語つておられたことがありました。

「ふだんは丁寧な播磨屋さんですが、こちらから、何を話しかけても、ただ、うなづくばかりです。話の繼ぎ穗がありません。あたしもほどよく樂屋を出てきました

が、男衆が氣の毒と思つてか、あたしの後をついてきてうちの旦那は清正を演る時は、樂屋にいる時から清正公になつてゐるつもりです。どなたにもあれですよ、と話してくれました。」

と村田さんは笑いながら語つておられたことがありました。

歌舞伎座で「二條城の清正」を上演した時でした。

大入つづきで座方は切符の割りふりに困つていましたので、わたくしは

「吉右衛門さん、二三日、延べをなすつたらいいかです？」と申しましたら

「からだを保ちません」という答えでした。

吉右衛門丈は上演中文字通りきびしい精進潔齋でありました。

若い人達に語る

宗教人門

(第三講)

佐藤 賢 順



今ここに在す佛

宗教は、人間と人間以上のものとの関係である、ということはこの前書きました。そしてそれを一應具體的に規定

して、人が佛を信じ(この場合は神を信じといつても同じこと)、その救いによつて、現實を超えた永遠の世界に生きることである、といいました。そして、その人間、主體の側の信するという働きについてお話しました。そこで、今回は信じられる對象、客體の側、佛とは何か、のお話になります。

現實を超えた眞實の世界、宗教の世界に入るのは、知性の働きだけではだめである、理性や學問、自然科學的認識では宗教の世界には入れない。また良心に基く道德的善行だけでもやはりだめである。人間の知性には限界があり、人間の知性の力の及ぶのは、ほんの僅かの所までであるからであり、人間の良心の力で行う善行などというものは、多寡が知れたものだからである、宗教的に生きるのには、宗教的な心の持ち方によらなければな

らない——これが前回のお話の要領でした。そう説きますと、それでは、宗教とはただ心の持ち方にすぎないのだろうか、ただ何となく有難いような氣がするとか、神々しく思われるとか、恐ろしいような氣がするとか、いろいろな氣分のせいだけのことなのであろうか、別段とりたてていふほどの相手のないのに、人間の心持だけが勝手に有難いとか貴いとか考えているだけのことなのだろうか。そういう疑いを抱く人もでてくるでしょう。これは當然なことで、特に若い人達にはそう疑う人も少くないでしょう。宗教がもし氣のせいだけのことだとすると、これは一種の妄想ですから、そんな妄想は早く振りすてて、もつと科學的に、實證的に考え直さなければならぬでしょう。宗教をただの人間の氣分だけの問題だという考え方は、大變間違つています。宗教を單なる主觀の事實だと考えた學者は、哲學者にも宗教學者にも、近世から現代へかけて、かなり多かつたのですが、これは、宗教とは何か、ということに對する答えを全く誤つてしまつたのです。宗教はただの主觀の在り方だけではなくて、必ずその在り方に應じて對象があるのであります。ではその對象とはどんなものでしょうか。

この人間の信ずる相手となる對象は、いろいろに考えられていて、決して一樣ではありません。鰯の頭であること

もあるし、動物や石や木であることもあるし、お水や護符であることもありました。また昔のギリシヤの神々のように、人間の社會へはいつてきて仲間になつて、一しよに暮したり酒を飲んだり、人間と戀愛をしたり嫉んだり崇つたりする神々であることもあります。それからまた、人間のどんな勝手な、虫のよい願ひ事でもかなえてくれる神や佛であることもあります。私の寺にも「しほり地藏」という地藏様があります。これは三百年も前から庶民の信仰を集めている地藏様で、「武藏風土記」などにも出ておりますから、隨分流行つた地藏様でしょう。しほり地藏というのは功德が他所へ行つてしまわないように、繩でしばつて逃がさないでおくので、毎年一度、秋の十夜法要に住職がこの繩を解いてあげることになっています。この地藏様に願をかけると、博打や富籤や無盡に當るとか、株や相場で大儲けするとかいつて、願がけの時には、こつそり地藏様の首を持つて歸つて、内しよで願ひをする、願がかなつたら首を二つにして返えす、というのです。そんなにお金に縁のある地藏様ならば、競馬、競輪にも大穴を當てさせて下さるだろうというので、そういう大望を抱いた秘密の参詣者もかなりあるようです。こういう目的は初めにお話したように、およそ宗教の本來の目的とは、遠く隔つております。博打や株や競馬、競輪の大穴など、僥幸を目あての一儲けは宗教とは何の縁もないことです。かえつてこのよ

うな放逸と貪欲こそ、超え出でられねばならないのです。大慈悲の權化として衆生の心の惱みを救つて下さるはずの地藏様が、勝手な欲望をかなえてくれる相手と誤解されているのですから、お氣の毒な地藏様だと、この寺の和尚である私は、いつも思うのです。

餘談にわたりましたが、神とか佛とかは、鰯の頭や石のかけらではありません。ギリシヤの神々のように、人間を嫉んだり祟つたり罰したりするものではありません。もしそんなものを神として拜む者があつたとしても、それは神を拜んでいるのではなく、人間を拜んでいるのです。また神とか佛とかは、働かずに大儲けしようというような身勝手な要求を安々と通してくれるような相手でもありません。

それでは、宗教上の對象はいかなるものであるべきか、といひますと、それは大よそ五つの條件を備えていることが必要であると思います。まず第一は、人間的な、私だけの欲望を超えていること、第二は、いつどこでも變ることのないこと、(常住にして永遠なること) 第三は、今、ここに存在すること、(曾て歴史的にこの世に存在したが今は居ないとか、今は居ないがいつかはこの世に現われるであろうとか、いうのではない。) 第四は、現に生きている生命として働きかけてくること、第五は、愛(慈愛といつても同じことである)であること。ですからこの五つに分けた

條件を一つに纏めて簡単にいえば、私どもの信ずるに足る宗教上の對象は、今ここに、愛の働きとして斷えず働きかけてくる大生命である、ということができます。

佛教では昔から佛を説明するのに二身とか三身とかいふ考え方があります。これはもと釋尊を佛陀として仰ぎ、早く歸依していた弟子達が、釋尊が入滅せられてから、その絶對歸依の對象の空白に堪えられず、考え出した説明で、肉身としての釋尊は入滅して今ここには在さないけれども、眞の釋尊は消えてなくなられたのではない。釋尊は遠い昔から既に佛陀であらせられたのが、かりにこの世に肉身の佛として現われたまうたのである。それが衆生化益の事を成し就げられて、もとの本佛に還られたのである。本佛としての釋尊は常住にして不變である。と信仰し體驗したのであります。初めは肉身としての釋尊と本佛としての釋尊という二身の説明で十分でした。ところがよく考えてみると、この永遠常住の本佛と歴史的にこの世に實在した肉身の佛陀との二つでは、どうもほんとうの佛というものゝを表わせない、何か大事なものが缺けている、と氣がついたのでしよう。といひますのは、永遠常住の本佛とか眞佛とかいふのは、法身であり、理法であり道理でありロゴスであります。誠にそれは永遠不變で絶對常住であるけれども、われわれ衆生とは直接には何の關係もない、救い

の手を差しのべてくれる生きた佛ではない、釋尊は長い修行の結果、大智慧と大慈悲とを體得せられ體現せられた生きた佛であつた、その救いの佛も今はない、ほんとうの佛は、今、現に在る悲智圓滿の生きた佛であるはずである——そういう憧れを持つたのであります。勿論、長い時代を經過した後のことではありますが、そして時代を經過すればするほどこういう憧憬と追慕はつのるばかりでありましたから、佛身の説明に三身という考え方が現われました。法身と應身（すなわち眞の佛と歴史的にこの世に現われた肉身の佛）の二つに加えて報身という考え方が出てきました。

報身とは、酬因身、原因に報いた結果として成れる佛という意味です。その原因とは無量の願行のことで、煩惱を克服して現實以上の境地に出ようとする長い間の數々の修行であります。因に酬いて果を感じた佛であります。ですからこの佛は人格的であり生命的であります。衆生救済の誓願を立てて、それを成就するために衆生に代つて長い間の困難な苦行を續け、それを成滿して佛となつたのですから、現に今ここにある佛であり、大慈悲の佛であります。それは阿彌陀佛のことでもあります。こういう佛こそ拜むに足る佛、宗教上の眞の對象であります。

法身・報身・應身の三身のうち、さきほど私が挙げた五つの條件に照し合せて考えてみますと、法身は、第一から第三までの條件は具えてゐるけれども、第四の生ける生命

であること、第五の慈悲であること、という大事な條項を缺いてゐます。應身は、第一と第四と第五の條項を具えていますが、第二の常住にして永遠であること、第三の今ここに在ることという最も不可欠な條件を缺いてゐるのであります。これに對して、報身は五つの條件を圓具した佛であるということができます。

今もちよつと書きました通り、報身の説明にはかなり物語的なところがあります。衆生救済のために數々の誓願を立てて、長い間の修行を續け、この行願が成就して佛となつて、今現に在るのである、であるから因に報いた佛、報身佛というのである——この説明は説話であります。若い人達にはこうした物語的な説明が氣に入らないかもしれません。筆者は、こういうことが腑に落ちない點かもしれません。筆者自身も長い間、この説明は説話だとして納得できなかったのですが、しかし次第に宗教における象徴的、形像的表現の意味の深さというものに氣がついて、このような形像的表現を用いるよりほかに、佛の生命性、人格性を、それとともに何物をも包む慈愛を、表現し説明する方法はなかつたのであることが、漸くわかつてきました。

しかし、翻がえつて考えてみれば、佛に二身も三身もあるわけではないでしょう。二身、三身ならまだしも、後世になると、四身、五身、六身、十身などというように、うる

さく細かく佛身を詳説するようになります。佛身の細説は宗教體驗の分裂であり、もともと一身一佛として仰信し歸依したものが、概念的に反省したり體驗から離れてしまつたりしたために、うるさく説明するようになったのでしよう。佛を表わすには大生命という言葉が最もよいのではないかと思ひます。尤も大生命といつても、それはやはり象徴的な言い方ですが、われわれ人間の生命とどこかで直結しているのであり、人間を支えて包み覆うてゐる力であり働きであり、曾てわれわれはそこから出てきたのであつた、やがてまたその懷へ歸りゆく所であるのですから、この言葉が適しいと思ひます。啄木の歌に、

ふる里の山に向いて言うことなし　ふる里の山はなつかしきかな

というのがありますが、われわれはこの大生命に對して、これに似た一種の郷愁を感じてゐるのであります。この大生命は、時に隨つて、衆生を突破口として、いや衆生ばかりではない、森羅萬象において、その眞の姿を現わすのであります。

そこで言い古された話題になりますが、このような佛とか神とかいう宗教上の對象は、一つか多數かということについて、考へてみてもよいと思ひます。ギリシヤやローマでは十二の神々があると信じられたことは前にも述べましたが、わが國でも八百萬の神々と申しました。民族宗教

の多くはこのように多神教ですが、これに比べて高度に發達した世界宗教であるキリスト教などになるとただ一人の人格神を信ずるようになります。一神教です。では同じく世界宗教として民族の制限を超えて發達した佛教はどうかといひますと、多神教とか一神教とかいう西洋風の類型に嵌め込むことができない、そのいすれでもあるといひえるし、そのいすれでもないといひえる、というのが本當でしよう。また汎神教（どこにでも神が在るといふ信仰）であるともいひえましょう。何故でしようか。

キリスト教では神は萬物を創造したのですから、神は造り主であり、自然も人間も萬物は造られた物であつて、何としても神にはなれない、神と人間との間には絶對の區別があります。神は萬物から超越して存在する人格であります。これに對して、佛教では、森羅萬象は緣起によつて生じてゐるのであり、世界は如來そのものの現れであり、如來の出現であり如來の性起であるのですから、佛が世界を創造したというようには考へません。ですから佛は、キリスト教の神のように世界から超越してゐる人格神ではなくて、森羅萬象そのものに即し、萬象そのものを離れたものではないのです。すべてのものがみな佛として拜まれるのです。萬象悉く佛であると思へる點では一神教ではなく、しかし萬象悉く佛だからといつて、佛が澤山あると思へるのではなく、唯一佛を考へるのですから、その點では多神教

ではありません。どちらかといえ、汎神教的というのが一番近いかと思えます。こういう考え方は東洋思想の特色でありまして、西洋思想に對して、東洋のこの特色をはつきりと打出さなければならぬのです。

佛教には自力門と他力門という區別があります。自力聖道門に對して他力淨土門といひます。鎌倉以前の舊佛教は勿論、禪の諸宗は自力門です。宗教的な生き方とは、人間本位の立場を自己批判して、それを超え出でることに始まる、ということとは前回お話した通りですが、その現實超越人間超越は誰れがするのか——勿論、それは自分の力でやるのだ、という自信を持つてゐる人達と、自己反省した結果は人間にはとうていそんな力はないから、自分以上の大きな力に頼つて、そうさせてもらふのである、と人間の力の限りを見極めた人達とがあるのです。これが自力と他力です。しかしよく考えてみますと、この區別はいつまでも固執されないでしよう。自力とか他力とかいうことをこの現實の限られた人間としての自分の力とか、それに對する他人の力とか、いふように相對的に考へてゐるならば、これは宗教ではないのです。宗教は相對的な現實の自己を突き抜けることが目的ですから、いつまでも自力にとどまつてゐることはできない、自分以上の自分を目指して今日の自分を打ち破つてゐるのです。自分以上の自分とは超自力でありませんか。自分を超えたものを豫め考へずには、自力ということとは考へられないのです。自力とはこの自分を

超えたものによつて支えられ働きかけられ、何れへかの方角を指し示されてゐるのです。この自分を超えたものからの働きかけとは他力ではありませんか。それは對象となるもの、そこへ向つて自分が進んでいこうとする目標でありますから、他者であります。宗教では自力というものは制限された意味においてであると思われまゝ。

曾て大正大學西洋哲學科の教授であつた葉上照澄師（今は阿闍梨と尊稱されてゐる）が、昨年、比叡山で千日の回峰行を成滿し、更に大護摩供を行つた。岩波寫眞文庫の「比叡山」は全卷この阿闍梨の行道の姿で滿されてゐる。最後の九日間は斷食斷水の苦行であつた。千日の回峰行も九日の斷食斷水も現代の奇蹟であるといわれている。徳川時代から現代までを通じて、この苦行を成滿した人は、葉上師一人であるということである。師は本年二月上旬の折大正大學でその苦行を語つて、

「いつもいふのですが『飛び込んだ力で浮ぶ蛙かな』という道歌がある。目をつぶつて飛び込む。あとは一切お任せして、飛ぶ込んだ力でスツと上つてくる。あの氣持です。」「いつも笑うのですが、叡山は難行苦行、自力聖道門とよくいわれます。とんでもない話で、こんな安樂な行はないそうでしょう。お任せなんだから氣が樂だ。任してやらしてもらふ。私が自分の力でやつたとは思ひません。」

こう述べられた。大きな佛力が人間にのしかかつて、人間に奇蹟を行わせるのである。（つづく）（大正大學教授）



五如來さまを讃えまつる

佐藤良智

七月は關東のうらぼん會、ご先祖さまに、父母に まごころを
さゝげ 廣大な みめぐみに 感謝したてまつる行事。なつかしい
ゆかしい このくにの血のなかに生きてゐるならわしである。尊
い そして 美わしい このくにの民族に 咲き誇る華の一つであ
ろう。長い年月に 月日の異りはできたが、全國のみ寺に きらび
やかに行われる行事、そして、家々に飾られる祭だん。美わしの華
をみ手に おゝおち おゝおぼの をくつきに詣でる。時は ま夏
のみ空に 大地に生命の力強くみなぎるころ。なにか 天地を貫い
て流れるものに 通じてゐる行事。

さて わたくしは 歴史のかけに ともすれば かくれがちな
みほとけの 御徳に あゝ いまひとたび あいたてまつろう。

あの みどりの笹にかこまれるしように (精霊) だんの おん
如來。 五如來と號したてまつる如來に 合掌したてまつる

ほうしよう (寶勝) 如來に きえしたてまつる

わたしどもは、どうしてこのように、はげしいむさぼりのこゝろ
に とざされてゐるのでしよう。世尊も仰せられています。むさぼ
りのこゝろは こゝろのなかの三大毒の第一であると。深淵のよう
に底知れないむさぼりのこゝろ。みづからをきづつけ、他をそこな
い 社會を汚し 人類の高き希望をくもらせるむさぼりのこゝろ。
このみ佛をおろがみ み名を稱ふれば よこしまのむさぼりの業を
除き、人のねがつてやまない福と智とを圓かにみだし與え給ふとい
ふ。むさぼりを 除いたこゝこそ 勝れたる寶がかゞやく。

みようしきしん (妙色身) 如來に きえしたてまつる

全國土を花一ぱいといふ運動がある。もろ手をあげて賛成であ
る。地上を美わしきもので満したい。これも人の切なる願いの一つ
である。しかし なんと醜きものに覆れたる地上ではないでしょう
か。むさぼりを除くところに美わしいこゝろ湧く。美わしきこゝろ
に美わしいかたちが滿つ。佛典に「心淨ければ土淨し」のことばが

ある。尊い。かほかたちの美しさも こゝろの奥底からにじみでて
こなくては 一見、あでやかにみえても どこか浅さの醜さがある
このみ佛を念ずれば醜陋を破りみえうるわしきを得るといふ。

かんろろう(甘露王) 如來に きえしたてまつる

眞理の雨を身と心にそぐことができれば身もこゝろも快樂極ま
るところがないにちがいない。眞理の雨などというものが一體ある
かどうか。それはひたすらに、眞理を求めてゆくもののにのみそぐが
れよう。甘露の雨 あまい雨 誕生佛にそぐられるあの甘茶のあ
め。甘露すなわち、アムリタとはまた 不死即ち永遠の命のいみで
もある。甘露王如來とはあみだぶつすなわち、無量壽佛のみ名であ
る。このみ佛をおろがみ み名を稱ふれば 永遠のおん命を得 身
もこゝろもこゝちよく楽しみ極まるところないという ありがたき
かな。

こうばくしん(廣博身) 如來に きえしたてまつる

わたくしどもの命をさぐえているものは一體なにか。口からはい
るものが主なるものであることはいふまでもない。う(餓)えた鬼
と言はれる すなわち がき道におちたものは 食物が目の前にき
てもものどに通らないという。そしてますます餓えてゆく。喉があい
て事なく食物が通ることは有難い。わたしたちは なにげなく 三
度の食事をすましている。しかし よくよく 思つてみれば 食べ
ものがあることは なんとありがたいことではないでしょうか。戦

時を思う。そして その食べもののがのどを通ることもありがたい。
このみ佛の名は ひろいひろいみ身からだといふ。このみ佛は びるしや
なぶつ、とも申します。あの奈良の大佛さまです。天地宇宙一切を
からだとなしたもうみ佛です。このみ佛ををがみまつれば 飲と食
を得ることが出来る。わたしどもは 食物を頂き そして生き永ら
え一體なにをするというのでしよう。私共は天地宇宙一切の一分を
分ち與えられて生きているのでしよう。このみ佛のなかで生かされ
ているのでしようか。それはそう信じずにはいられない。それゆえ
に このさゝやかな 命も 尊くうけて 力のかぎり 廣く ひろ
く生きぬかなければならない。あゝ 南無廣博身如來さま。

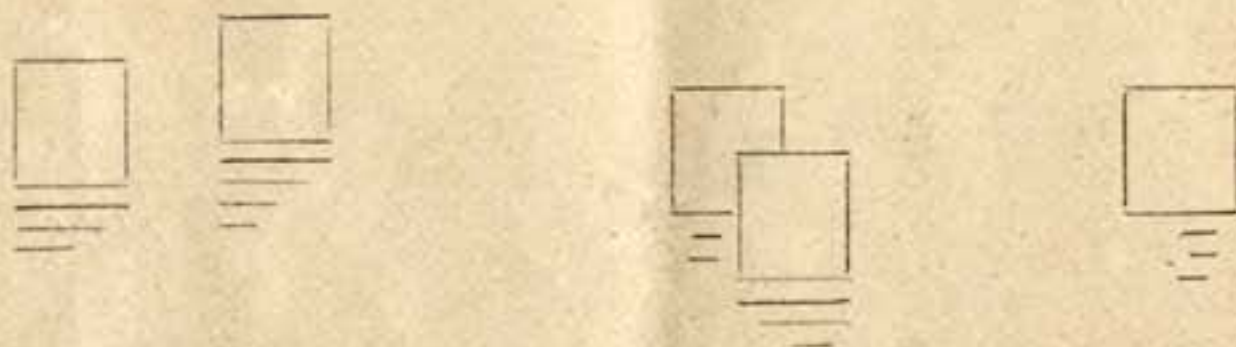
りふい(離怖畏) 如來に きえしたてまつる

怖ろしきものの人の世にみちてかぎりない。人がもし眞實におそれ
といふものから全く離れることができたならその人は何と仕合せな
ことでしょうか。

もし人が怖れることなく行い 生きぬくことができれば 心やす
らかであろう。怖れに會ふともこれをこわがらず 堂々と生きぬく
ことができたなら 心やすらかであろう。廣博身のなかで み佛のみ
からだのなかで生かせて頂ければ そこから怖れは離れて行こう。
否、をそれにあつておそれず。これこれ信仰生活の高き徳である。
離怖畏如來さま。願くは生涯われわれに怖れなからしめ給え。わた
くしはまづしく五如來をたゝえおわつた。

お盆を迎える度に

須藤隆仙



俗に「盆正月」と申します。

誠に盆は正月と並んで年中の二つの大きな行事でございます。

今年も又こうして無事にお盆をお迎えするところが出来た、よくよく考えてみますと非常に有難い極みでございます。

毎年々々来るお盆ではありますが、本年も又無事にお迎えする事が出来た、これは心の底から感謝し、喜ばねばならぬ事でございます。

この間ある處へ行きましてこの様な事を申しましたらある人が質問を致しました。

「一體何でそんな事に迄感謝しなければならぬのですか。何も私達がそんな事に迄感謝しなくとも、盆も正月もだまつて来るではありませんか」と

こういふのであります。

そこで私は申上げておきました。

「諸行無常、老少不定、いつどうなるかもわからないお先眞暗の私達が、こうしてこの年迄無事に生き永らえた、そう思つたら来る度毎に盆だつて、正月だつて有難いじゃありませんか」

そうすると、

「うーん、なる程」

というのです。

何故か年寄り臭い様ですけれども、しかしこれは、本當の話でございます。

一體この頃の世の中は、もう若いも年寄もありません。危険千萬で何時、何處でどうなるかも知れない、可愛い中學の坊ちゃん、嬢ちゃんも修學旅行に出たと思えば、船やバスがひつくりかえる、汽車に乗れば汽車が火事を起して文字通り火の車、……。

いや、この間私の居る函館で大變な事が起りました。新郎さん廿五歳、新婦さん廿三歳の結婚したばかりの若夫婦、青森の方達ですが、わざわざ新婚旅行に函館の湯川迄やつて来た、湯川の温泉旅館に泊つて若い人生の楽しい第一歩をふみしめようという時、その夜旅館で火事を起した、さあ大變、この新夫婦の寝ていた所は三階の離れ部屋、電気は消えた勝手はわからない、そうこうしているうちに下の方からどん／＼煙が上つてくる、旅館はすつぽり丸焼けになつて、翌朝焼跡を探してみると、哀れこの新夫婦、妻と夫は二米許

り離れて黒コゲの死體となつて現れた。

随分人々の涙をさそいました、しかしいくら後の人が泣いたとて黒コゲになつた新夫婦は生きて返つては來ません。新しい人生の出發が、悲しや、哀れ死出の旅への第一歩、世の中というものは全く無慈悲なものでございます。

ですからこんな世の中になりますと、何も六十、七十生き永らえた人のみが今日ある事を感謝しなければならぬという、そんな呑氣なものではない。子供も若人も誰も彼もが今生きているということ、今迄生かされて来たという事を感謝致さねばなりません。尤もそれが本當でございましょう、年寄でなければ生きて来た喜びに感謝する特權は無い様に思つていたのが感違ひで、

明日ありと、思う心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかわ、の世の中であつてみれば、若ければ若いなりに、年寄であれば年寄なりにそれぞれが今日の生活へと感謝の念を抱かねばなりません。

さて、お盆を迎えまして、こうして特に又お盆であるとか、お正月であるとか、お彼岸

であるとか、それぞれ特別な日に改めて今日あることを感謝してみる、これは大變大切なことであり、又そうありがたいものであると思います。中でもお盆というのは一口にいえば「感謝の行事」といつても良いものであります。

勝手な言葉を用いて申譯ありませんが、私はお盆を「感謝の行事」であると思つております。何に感謝するか、申す迄もなく、先祖代々、今日迄生かされて来た御先祖のみ魂へ感謝するのでございます。

この間實は大變面白い話を聞きました。あるお母さんと娘さんとが盛に口論をしておる、娘さんはもう女學校へ行つてゐるものですから仲々理屈もうまい。

「お母さん、何もわたしはお母さんに生んで下さいといつて頼んだわけではありませんよ、それなのにねお母さんは勝手に生んでおいて、それで今度はその子が大きくなると何だかんだと親の權利を主張する、そんな矛盾した話はないでしょう」

こういうのです。するとお母さんが

「勿論そりやそうよ、だけど母さん達親というものが居なかつたら、あなたという存在も無いのですよ、あなたはやはり親があつてのあなたなのですよ」

又娘さんが

「無くたつていゝわ、生れて來なかつた方が幸福よ」

「生れてこないで存在すら無いものに幸福も何もありはしないでしょう」

「何でもいゝ、とにかく頼んで生んでもらつたのではないわよ」

するとすかさずお母さんが

「あく迄も親が勝手に生んだというのね、勿論それで結構よ、じやあなたも二度とこのお母さんの様に勝手に子供を生まない様に良くこれから生れて來る赤ちゃんに相談してから生んで頂だいね」

これには流石の娘さんもグーの音も出ませんとうとうお母さんに降参してしまいました。この「父と子」ならぬ「母と子」の話は誠に滑稽で、それでいて譚問答の様な面白味がございます。

「あなたも、これから子供を生む時、生れ出

る赤ちゃんに相談して、生んでもよいかどうかを確めてから生んで頂だい」

このお母さんの言葉は正に名言ではないでしょうか。

私達何だかんだと威張つてみても、親がなければ存在はないのです。

生れぬ方がよかつた等といつてみた所でそんな事は問題になりません。

生れ出たということから始めて色々なことがらが出てくるのであります。とにかく親は親であり、親無くして私達は無いのです、ですからもうここ迄考えてみれば明かに「生きてゐる」ということが唯一途に親のお蔭です。そしてその親も又その上の親のお蔭で生き、その上の親もその又上の親のお蔭で生きたわけであります。即ち先祖代々のお蔭というところがこゝに出てくるわけであります。

「孝順をなすものは、念々に父母及び亡世の父母を憶念せよ」と孟蘭盆經というお經にあります。私達がこうして年に一度丈でもいい、先祖代々の恩に感謝することの出来る機会をもつということが意義深いことであります。父母及び御先祖の恩に感謝するという

ことは人間として當然のことです。人間が萬物の靈長などといつて威張れるのは一體何の爲でありましょうか。

人間には「深い考えの力」があるということでもあります。「人間は考える動物」であるといゝます。此處に單なる動物と異なるところがあるのです。

「深く考えてみる」

この事はもつと良く思いをめぐらしてみると「自分の立場を知る」という事にもなります。

「人間は自分の立場を知る動物」である。唯考える丈なら犬でも猫でも鳩でも鳥でも、皆それなりの考えはもつてゐるのですが、人間は自分を見る事が出来る、自分の立場を知る事が出来る。犬や猫には自分の立場とか、自分を見る事とかは出来ません、然し人間は自分の立場を知り自分を見ることが出来る。

此處に人間は萬物の靈長であるといつて威張れる理由があります。

随つて今先祖代々のみ靈に感謝するということも、實は先祖代々の力に依つて生かされて來たということ、即ちその様な自分の立場というものを認識することでありまして、自分を知り、自分の立場を知つたことの一つであ

ります。

自分が先祖代々の尊い力に依つて生かされてくる。この様な自分の立場を知ることとは、人間として當然かくあらねばならぬ人間の価値の世界であります。

ですから逆に此の事は、もしその様な生かさされている自分の立場を知らない、知ることが出来ないとしたならばそれはも早や、人間の価値に住することは出来ませんし、萬物の靈長でもありません、正に人間失格であります孝行ということはこの様な人間的価値の中から自づと生かされてくる自分を知り、その生かして下された先祖代々への感謝、更に現存する両親への感謝の氣持の實際的行動となつて表われるものでありますから、これは極く自然であるところの、人間としての當然の所作であります。何も孝行は古い道徳でもなければ、封建的な仕來でもありません。

こうしてお盆を迎える度に、今日迄生かされて來たということ、そして今現に生きていくということ、更に深くしては父母及び代々の父母(祖先)あつて生かされているという事への不思議な喜びの力の中に、これから益々意義深く生きることを誓いたいと思います。

(合掌十念)(函館稱名寺執事)

時 言

十四日NHKの第二放送が、「現代をいかに生きるか」というテーマの座談會を堀田善衛、梅崎春生、武田泰淳の三人で語らしていた。戦後社會のもつ條件と日本人と特質と日本史の限界等について論じ、現代日本人の民族性の背景に迄及んでいた。その態度は、この問題を提起した一青年に極めて好意的である。確に若い人々にとつて現代に生きる価値の發見は、眞剣な問題であらう。だが、この様な設問の仕方自體、人間の永却の繰り返しでなからうか。假りに、生きる価値を發見し得たとしても次には、「何をなすべきか」を問わなくてはなるまい。人間の生長過程の一時期にあり勝ちな哲學的な懷疑と云つてしまえばそれ迄だが、より大切な事は、今自分が生きていくという事實にもつと深く想いを到す事ではなからうか。勿論金持主義國家がもつ様な、一つの權威、一個の偶像的目標が變えられて生活してゆく事を希む譯ではな

からうが、若し、そう云つた設問を投げかける人が極度のニヒリズムやスケッチイズムに病的にすらなつていないとしたら、大凡この問いは、無意味と想われる。激しいニヒリズムや徹底したスケッチイズムに墜ち入つた人は恐らくこの様な質問を放つ前にもつと、嚴然たる「生」の一事に卒然たる氣持になるのではあるまいか。日本人は兎角何々の爲に、とかどんな価値が、と速急に價值判斷を求めたがる。無意味の意味という事など解しようともしない。それは又近代人の通弊でもあらう。何の爲に念佛するのだ。信仰すればどんな價值(利益)があるのか。そう云つた常に自分の行爲の代價を求める氣持が人間の欲に搦んで、盡きる事なく反覆されている。

若い人達を宗教へ導き入信させる爲にはこの價值主義を捨てさせる事が大切であらう。人間が無償の行爲をよく知る事が、どんなにか必要な事か、それは、宗祖大師の「唯よく〱念佛申させ給え」という易行往生の眞髓を知る事ではありはしまいか。

(H・TAKASE)



地獄と極樂の話

惠 谷 隆 戒

山口縣の西の端に、仙崎と云う町がありまして、その向いに大日比と云う小さな島がありますが、そこに、今より凡そ百數十年も昔、法洲上人と云う、當世まれにみる高德のひじりがおられました。その名聲は遠くまでひびきわたり、たれ一人知らぬ者はありませんでしたが、ある日のこと、仙崎に住む武士が、上人をおとづれてまいりまして、ツカツカつと、上人の書齋に足をふみ入れ、初對面のあいさつもしないで、いきなり、あなたは常日頃、地獄や極樂の説教をしていなさるが、ほんとうに地獄や極樂があるものならば、私の目にも見せてもらい、説明もして頂きたいのですが、もしも、それが出来ないとおつしやるならば、あなたは、うそいつわりの説教をして、世の中の人をたぶらかしているのでありましょう。そんなうそつき坊主は、

この世の中に生かしておくことは出来ないと言つて、理窟をならべてじりじりと詰めました。すると上人は、そしらぬ顔をして、机についたまま書見をしておられました。いつまでたつても、見せてもくれないし、説明もしてくれないものであるから、武士もいささかたまりかねて、ついに堪忍袋のおをきらし、たばさんでいた三尺の秋水を、ズバリと引き抜いて、大上段にかまえて一刀のもとに切りすてようと致しました。このとき、上人はすばやく身をかわし、サツト後に向きなおり、大喝一聲、オー、その姿を地獄と云うのじや、と云われますと、ハツとして我が姿に氣のついた武士は、卽坐に大刀をさやにおさめ、兩手をつき、ひたいを疊にすりつけて、ひらあやまりに、あやまりました。すると上人は、アー、その姿を極樂と云う

のじや、と云つて説法されたのであります。上人の教を聞いた武士は、自分の心がけの悪かつたことに氣がつき、前非を悔い改めて信仰生活にはいつたと云う逸話があります。

この話は、一見何んでもないことのように思われますが、その中には、言葉や文字で表現することの出来ない、信仰上の奥深い理論が秘められているのであります。凡そ地獄とか、極樂とかと云う問題は、神や佛を信することによつてのみ、味合うことの出来る境地でありまして、學問や理窟によつて解決のつく境地ではありません。ですから高慢心の強い武士が、理窟をならべて上人にくつてかかつたとき、上人が説明をされなかつたのも理の當然でありまして、説明することがかえつてナンセンスであります。上人が武士の行いを通して、腹のどん底から、地獄と極樂を體驗させたところに、まことに奥深い意義があるのであります。

對者が理窟をならべてせまつて來た場合、こちらが理窟でもつて答えたならば、理窟に理窟がつきまとうて、どこまで行つても解決はつきません。そこには、ただ争いの姿のみ現れてまいりまして、お互が氣を悪くし、感情を害するだけにとどまるのであります。夫婦げんかも、兄弟げんかも、勞資の争いも、國と國の争いも、元をたづねて見ますれば、皆お互いに、我の突張りあい、理窟の云いあいか

ら起つて來るのであります。こうした姿は、決して家庭を明るくし、世の中を楽しくする所以とはなりません。人生の眞の幸福は、争いや、不平不満をかちおうことにあるのではなくして、争いを超え、理窟を超えたところにあるり、お互いに、對者の立場になつて、ものを見、ものを考え、對者のものになつてよろこび働くところに、眞實の世界があるのであるのではないのでしょうか。神や佛に手を合せ、おがんでおりますと、ひとりでに、このうるわしい姿が出て來るのであります。争いの心がなくなり、理窟を云わなくなり、いつも己をかえりみて、人の氣持をおしはかり、時と所をわきまえて、あらゆる道を身に修め、あたりや先きを見通して、過ぎこし方もふりかえり、無駄なく己が務めを完うする生活が具現してくるのであります。それは偉大なる宗教的人格に接することによつて、自己を反省する力が、強力に展開して來るからでありまして、他人のことを、とやかくとせんぎするよりも、自分自身の行いがはづかしくなつて來るからであります。

心の中に信仰のともし火をとぼしておらない人は、心からやみでありますから、他人の行動に對して疑い深くなり、そねみ、ねたみの心が起つて來るばかりでなく、自分を反省する力が働いてまいりませんから、自分のすることなすことが、一番よいと考えるようになり、自分ほどえらい者はないと考えるようになつて來るのであります。おれ

が、と云う考え方にとらわれておりますと、對者を見下げたがる、馬鹿にしたがる氣持が動いてまいります。そうになると、對者の方も、逆にこちらの方を見下げ、馬鹿にするようになり、兩者の間に、うたがいと、うらみと、そねみと、ねたみと、いかり腹立ちとの絶え間がないことになつてくるのであります。それが次第にこうじてまいりますと、心のやいばをもつて、對者を傷つけようとする、まことに恐しい地獄の姿が現れてくるのであります。

しかし、信仰のない人は、自分の心が地獄のような、恐しい姿であることに氣がつかずにあります、反對に、信仰のある人は、常に神や佛の偉大なる宗教的人格の鏡に、己の心や、行いをうつして見るものであるから、自分の心の見にくい姿に氣が付き、自分の行いの罪深いことに、すすり泣く氣持が湧き起つて來るのであります。そこには、おのづから、神佛に對し、世の中の人々に對し、夫に對し妻に對し、親に對し子に對して、あいすまぬ、申しわけがないと云う、慚愧懺悔の心が起つてまいります。自分の行いを悔い改めると云う氣持になつてくると、自然に物の見方、考え方が變つてまいりまして、自分が一番えらいのではなく、自分ほどいたらぬ者はない、自分ほどおろかな者はないと云うように變つて、自分の力で生き働いているのではなくて、神佛のおかげの中に、人々のおかげの中に、生き働かせてもらつているのであると云う自覺が起つてま

います。これを宗教的自覺と云うのでありまして、この自覺が強まれば強まるだけ、おれが、と云う心が折れて來て、自分のなすべきことと、なすべからざることとが、はつきりと區別されてまいります。自分のなすべきことをふみ行つているときには、ありがたい、もつたいない、と云う氣持がこみあげてき、自分のなすべきことをなしておらないことに氣がついたときには、あいすまぬ、申しわけがない、と云う氣持がこみあげてまいります。このありがたい、もつたいないと云う氣持と、あいすまぬ、申しわけがないと云う氣持の中に、日々の日暮をしている人が、所謂極樂ぐらしをしている人であります。

我々が一步退いて、靜かに己をふりかえり、天地宇宙の道理をみつめ、自分の今日ある所以を考えて見るならば、限りなき天地の大み力の中に育くまれ、生かされていることに氣が付き、限りなき人様のおかげの中に、生き働かせてもらつていふことに目醒めれば、すべて世のため人のため、愚痴や不平をこぼさずに、いつも笑顔でへだてなく、なさけ心のつくしあいの、美しい姿が實を結んでくるのであります。神や佛のおかげの中に、育てられ生かされているのであると云う信念が、強く働けば働くほど、心の中が明るくなり、愚痴や不平が起らないようになり、そねみ、ねたみ、いかり腹立、おごりたかぶる心がなくなり、心の闇みは除かれて、いかなる苦勞もいとわすに、よろこび働

く身の上とならせてもらふことが出来るようになるのであります。

こうした天地の大み力のおかげに目ざめて日暮しすること、家庭の上から申しますれば、夫は妻のおかげ、妻は夫のおかげ、子は親のおかげ、親は子のおかげで、生き働かせてもらい、務めを完うさせてもらつてゐることになり、社會の上から云えば、世の中のおかげ、人様のおかげで日暮しさせてもらつてゐると云うことになるのであります。おかげの中に日々の生活をさせてもらつてゐることを、ありがたい、もつたいたいと思つて日暮をしておりますと、すること、なすことが、悉くありがたい、もつたいたないと云う氣持の中に、日々の生活がなされてゆき、たとえば、赤貧洗うがとき生活をしておりましても、日々を感謝の中に日暮し出来る人は、この世の中で一番幸福な人と云うことが出来るでありましょう。たとえ財産があり、衣食住に不自由のない人でも、心の中にもだえなやみがありましたならば、それは世の中で最も不幸な人と云わねばなりませんまい。地獄ぐらしをするも、極樂ぐらしをするも、要は、我々人間の心の持ち方如何によるのであります。我々は一日も早く、心の中に信仰の灯火をつけ、明るい楽しい人生を遇すと共に、香り高い宗教的人格を形成すること、つとめはげむことが大切でありますまいか。

(この原稿は五月八日NHKから放送したものです)

(佛教大學教授)

御袈裟法衣御調進

○錦金襴

○特種織物

○御水引

○御打敷

○御幡

○稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新製の稚
兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中高校
淑徳學園

御用達

東京都港区西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

話 童

三ちゃんの
の
ふしぎ

山田 嚴雄

三ちゃんはふしぎに思えてなりませんでした。

「お母さんは、ちつとも寝ないでいるのか知ら？」
これが三ちゃんの考えているふしぎなことでした。

× × ×

三ちゃんは小學校の一年生です。

この夏はじめて夏やすみを海邊ですごすために、お母さんと一しよに、海岸に近い親類のお家へ來ました。

青い海、白い砂、きれいな貝がら、新らしい浮き輪、海水着、舟、松、岩、どれも三ちゃんにとつて、素敵なものばかりです。

× × ×

三ちゃんが海邊へ來てから四日目の晩は、ひどい暴風雨（あらし）でした。

ドシヤ降りの雨の音にまじつて、うなる風と、荒れ狂う

浪の音が、ものすごく聞えて、家がグラ／＼と動きまわった。

天井から雨水がボタ／＼と漏れてきました。お母さんやおぢさんたちがバケツや洗面器をもつてきて、滴を受けました。

フト電氣が消えてまつくらになりました。停電です。

外はまだヒドク荒れているので、三ちゃんはこわくなつて、何度も、何度も、お母さん呼びました。

「お母さん。」

「三ちゃん、大丈夫よ。」

何度でも御返事がありました。

三ちゃんは安心して、やがて、ウト／＼寝入りました。

× × ×

それから四五日経つてから、三ちゃんは病氣をしました。

お醫者さまは食あたりだろうとおつしやいました。

熱が高くて、なんだか寝苦しい夜がつゞきました。その間ちゆうおさまは始終三ちゃんの枕もとに坐つていて下さいました。

いつ目を開いても、やさしいお母さまのお顔が見えませんでした。

× × ×

夜中に、ヒヤリと冷たいものがヒタイに當つたので、三ちやんが目をさますと、お母さんが洗面器に裏の冷い井戸水をくんできて、手拭をしぼつて、三ちやんのヒタイにのせて下さつたのでした。

「お熱があるから冷してあげたのよ。早くよくなつて、また海で泳ぎましようネ。」

「うん。」

三ちやんはニガイお薬をがまんして飲みました。

×

×

×

三ちやんの病氣は少しよくなつて、床の上でお菓子が食べられるようになりました。

夜中に、三ちやんがよく眠っているさいちゆうに、ふいに、グラグラとゆれたので、三ちやんは驚いて目をさしました。

「お布團のお引越しですよ。」

布團をヒツパリながら、お母さんが笑い顔でおつしやいました。

「三ちやんがお菓子をコボしておいたので、ごらんさない、大變な蟻よ。」

隅の柱の下から、長い蟻の列が細く、黒く續いていて、布團のそばのお菓子のカケラは、黒山のように蟻がたかつていました。

ポーン、ポーン

柱時計が二時を打ちました。

「夜中でもお母さんは寝ないで、起きているのかしら？」
三ちやんはふしぎ、そんな顔でお母さまの顔を見ました。

×

×

×

ようやく病氣がよくなつて、三ちやんはまた海で、浮き輪につかまつて、海邊で仲よしになつたお友だちと一緒に泳ぎました。

お母さんは海邊でニコニコしながら、御自分もたのしそうに見ていらつしやいます。

「お海さんは夜もチツトモ寝ないでいるのか知ら？」

フト、三ちやんはこう考えました。

そして、お母さんの顔をジツと見ました。

「どうしたの？。三ちやん。」

「ううん。」

生返事をしたまゝ、三ちやんはニツコリして、心の中でいいました。

「僕、お母さんが一番大すきだ。」

……あとがき……

○これは私の幼い頃のなつかしい思い出の體驗が織り込まれている私のごく初期の作品です。

(童話家・魚籃幼稚園長・東私幼理事)

盆の新母

子照内寺

で見なければならぬ立場に置かれているので、お盆の來るのが十日も遅れりやいいがと一人つぶやきながら夕暮れの田んぼ道を急ぎ足で家に向つた。もうあたりは暮れて、向うから來る人の顔もわからない。ふと山のふもとを見ると、梅林の細い寺門の道が白く續き墓地の石碑が幾つも並んで立つてゐる。その端寄りに、半年ほど前亡くなつた母の墓屋根が浮かび上つて白く眼に入る。母も土の下できつと心配してゐるであらう、「家思いで暇なく働き續けた母だから……」そう思いながら母の新盆が氣にかゝり知らず急ぎ足で家路に向つた。

この村では、盆三日前には墓掃除を一齊に行ふ事になつて居り、眞知子も父に連れられ竹の筒と、オガラ（麻の皮をむいたもの）とを持ちその他鎌、鍬などを籠に背負つて行くので、眞知子は始めての経験に興味をそそつた。竹の花さし、オガラのお膳（下に四ツの足をつけた）とをつくりそこに茶わん、お皿おわん、コップと新しいものを供えかえた。こんな仕事で約一日がかりである。そして十日からお盆になるまでが急がしい。家の周囲の整理、お盆の買物、御馳走の下準備と、他の仕事は手がつかない。又これまでに一應田

や畠の方は一段落をつけて了ふのである。眞知子も新盆に供える一式の盆道具を、十一日の學校の引けの後、自轉車で二里ほど離れた町まで出かけなければならなかつた。その盆の飾付けが十三日の正午頃から始められるのであるが、それをどんなにか、子供達が楽しみに待つてゐるのである。三月のひな祭りや正月のしめなわ飾りに増してきれいだからである。

祭壇の花、大小の燈明、一連にしたホホヅキ、大きな南瓜、家寶の如き年に一度きり出さぬ唐焼きの器と云い、みな見事なものばかりなのだ。その他一式の盆道具の中には、わかめ、うどん、ハスの葉に造花がかやの莖で編んだ中に包まれているのである。みなそれぞれ意味をもつてゐるのであらう。それらが祭壇に乗りきれないほど美しく並べられる。そして夕暮迫る頃、御魂を迎える人々が片手に提燈を持つて墓の方へ急ぐのである。

父の飾付けやら、おばあさんの御馳走の用意を手傳つていた眞知子は、目がまわるような忌しさに、「お盆つて忙しくていやだなあ、これじゃ明日もその次も遊ぶどころではない。みんな友達が眞ちゃん遊ぶうよ」なんて誘ひに來ても臺所で一日立働かねばならぬ

後一週間でお盆であると云うある日、眞知子は、毎日忙しい思いで過している。家の中の整理、親戚への通知、妹弟の着物の世話ま

い。まだ中學二年になつたばかりの眞知子は遊びたい心、せめてお盆ぐらいは……と楽しみにしてゐたのであるから、いや味がさすのは當然であらう、それに妹や弟と祖母のめんどろ。父は餘り健康でないものでつい重荷は眞知子にかゝつて來るのである。祖母も暇にあかせて臺所の用やつくりものぐらしいしか出来ない。でも眞知子は評判の素直な娘である。

よく弟や妹のめんどろもみる。一段落ついた臺所の仕事を祖母に頼んで、遅くならない中に「お母さんを迎に行つて來なけりや」と思ひ、弟の信ちゃん、君ちゃんを誘つて出かけた。信ちゃん、はすんだ足どりに鼻唄まじりで先に立つ。きみちゃんは眞知子の手にぶら下りやはり上機嫌。眞知子はもう片方の手には提燈を背負い帶とを持つてゐる。君ちゃんは初めて氣づいたらしく「お姉ちゃんそれどうするの」と不思議そうにきいた。眞知子もよく知らなかつたが、お迎には背負い帶をもつて行き、み魂を背負つて來るといつか母と一緒に祖父ちゃんの迎え盆のときかされた事を思い出したからである。

「これでお母さん背負つて來るのよ」と云うと

「そうお姉ちゃんおぶえる」

ときかれて

「そうね、だつてお母さんあんなに細くなつちやつたからおぶえるわ」

と云いながらも、體に帶を巻きつけている姿を想像してちよつと躊躇したような氣にかられた。弟はそれを黙つてきいていたが

「それじゃ、お父さん呼べばいいじゃないか。いつかおじいさんの時、お母さん行つたね」と云う。

「それはおじいさんは年とつていて歩けないと思つてなのよ、お母さんはおぶわなくても大丈夫なだけだよ！」

と口をつぐんだ。臨終の床のやせた母の姿をありありと思ひ出したからである。

その頃は周圍がすつかり暮れて、提燈の明りだけが一層明るく見えた。

「お姉ちゃんお墓まで行くの？もう誰も居ないよ。お母さんだつて誰だつて居ないじゃないの？」

「もう僕達が迎に來るのが遅いから行つちやつたんだよ」

と弟も足を止め三人はそこに立止まつた。遠くで鳴りはやす太鼓の響きが、一層大きく聞えて來る。圍りの家々からせわしく話す聲が明け放された雨戸や障子を通つて聞えて來

る。三人は寺門の長い道を曲り、梅林をつき

抜けて墓につくと

「お母さん迎に來ました」

「今日から家で色々お話が出来るね」

「お母さんが生きて來たら私あのお人形みせるわ」

等一人／＼話しかけるようにつぶやいた。

「さあ戻ろう」

と信ちゃんが云うと

「違ふは行きましようだわ」

と云い直す。

三人は提燈を持つ弟を先頭に今來た道に戻る眞知子は背負う事など忘れ、唯提燈を見守るだけである。この灯は母のみ魂なのだ。この提燈に乗つて歸るのだと思う心は、弟も君ちゃんも同じように、そろ／＼と歩き出し誰も話すものも居ない。唯黙々と提燈を見守つてゐる。まぢまちな足音と鳴り續く太鼓の音だけである。水邊の小道にさしかゝると、ボチヤァン／＼と飛び込む蛙にハツと驚かされ立ちすくむ。弟は「僕達の行列に蛙のやつ驚いてゐる！」と大きな聲で云ふ。眞知子もそれにつれて君ちゃんの顔をみると、何か考え深そうな眼を水の流れに轉じながら

「お姉さん、もう一度お墓に戻らない！私ね

さつきあそこにあつたお花が何か云つていた
 ような氣がするの。そしてお話があるみたい
 に悲しそうな顔をして私達みていたわ」

「あのお花？どこんとこの？」

君ちやんは何を云つてゐるのかしらとけげんに
 思う眞知子に

「あそこんとこの白木金のお花なの。あのお
 花が私もつれて行つて下さいといつていた
 ようだつたわ。私にはそれがよく聞えるのよ。
 私行つて来る……」

とかけ出した君ちやんはもう走つていた。呼
 びとめるともなく待つともなく二人は後ろを
 見送つていた。闇夜の中に消えた君ちやんは
 十分二十分と歸つて来ない。

「僕先歸る」と云う弟に眞知子もそうだおば
 あさんが心配していると思うと、

「信ちやん先にお歸り。それでおばあさんに
 足を洗つていただいて、あそこの湯桶に水を
 汲んでね！そして佛様の祭壇まで案内するん
 だよ」

と注意して自分も今来た道を歩き出した。途
 々眞知子は何んとも云えぬ異様な氣持で、君
 子のことが氣にかかり、木金の花が浮かんで
 たまらない。急いで墓に着いてみると、君子
 は暗い中に棒立になつていた。木金の花を一

枚持つて、眞知子が近づくと靜かに云つた。

「このお花、お母さんと一番仲良しでいつも
 色々お話しているんですつて。お母さんが行
 つて了ふのがさびしいですつて」

私は黙つて聞いていた。

「お母さんがここに來た時、私も來たのです。
 それからずつとお互いに慰め合つて來まし
 た。あなた方のお話もきいていました。とて
 も心配で夜も寝れないとまで云つていまし
 た。そしてお盆が來ると子供に會えるのだと
 それはそれは楽しみにしていました。ここま
 で迎いに來てくれるのも、きつと、あの三人
 の子供達に違いないと待つて居られ、私がさ
 びしがるとすぐ三日で歸つて來ますよと行つ
 て了われたのです。私も人間だつたらあゝじ
 て家に歸るよろこびもあるであろうに、でも
 私にだつて魂はある。そうだあのお嬢さんに
 たのんでみようと思つて……私もつれて行つ
 て下さいお願いします。私は人間じゃないから
 おむかえされなくても、佛壇の一隅に置かれ
 て、人々を慰めてやりたいのです。貴女のお
 母さんの側に居たいのです……」

が大事そうにかかえて、二人は歩き出した。
 「そうだわあの木金の木は豊岡のおじさまが
 わざ／＼お母さんの爲にお葬式の時持つて來
 て下さつたんだつけ。そしてあそこに植えて
 「これが夏になると花が咲くんだろう。きつ
 とお盆のころは見ごろだよ」
 と云つていた言葉を思い出した。あの時はま
 だ小さくて根がつくかどうかとも心配なくらい
 だつた。その木がいつしか母の魂と結びつき
 人里離れたこのものさびしいところで慰め合
 つて居るのだと思うと、いつも無愛想のおじ
 さまが母とさも打ちとけ合つて話していた昔
 が思い出され、いつまでも母はおじさまにお
 合い出来るのだと思つた。もしそうだつたら
 私は此世で一番いい話相手をつくつておこう
 そしてその人が何時までも私の側にいて、お
 互いに信じ合えたら、死などちつともこわく
 ない。それどころか幸福に違いない。そうだ
 わもう年老いて明日にも知れぬお祖母さんの
 よき話相手になろう。そしてお祖母さんのよ
 い孫娘としていつまでも可愛がられ、私も孝
 行して、み魂と共に暮せるようになろう……
 ……いつしか着いた家近くで、垣根越しに線香
 のほのかな香りが漂つて來た。佛壇の燈明の
 ほのほが赤く、ゆえんが木金の花にかゝり一
 層美しく見えた。

父と母を語る

内 山 憲 尚

伊豫の吉田藩の貧乏士族の次男に生れた父は、兄が家督を相續して自分は平民の籍に入ることをきらつて、播

十年頃に女學校を出たのだから當時のインテリだつたにちがいない。

州龍野の家老の家に後つぎがないので夫婦養子となつて内山家へ入つた。それ位だから所謂武士氣質で、曲つたことが嫌いで、金錢に冷淡で、「金は一厘でも借り貸しをしてはいけない」と教えられた。萬事が武士的教育で、冬でも炬燵は入れられずどんな寒い日でも眞裸になつて、木綿のゴツゴツの單衣の寢巻に着替へさせられ洗面に、湯は使用させられなかつた。

内山家は禪宗であつたが、毎朝佛壇に御飯をあげて、「南無阿彌陀佛」をと覚えていたように覺えている。當時高等小學校で裁縫の教師としていたので母の顔は夕方にならなければ見られなかつた。

今から考えれば少しむごいような教育ではあつたが、

所謂良妻賢母型で、三つ指をついて父を送り迎えし、

私自身としては決して苦痛とは考えなかつたし、五十をすぎた今日まで、そのまま續けている。習慣は怖ろしいもので、友人の家などに泊めて貰つて寒い朝洗面に湯をとつて貰つて湯で顔を洗うと氣持が悪くて湯で洗つた後で又水をくんで洗い直さなければ氣がすまない。

世話好きのところも父から受けついでいるようである

どんな父の無理でもだまつて聞いていた。父に別れて七十をすぎた頃、「今頃和歌のお稽古をしています」といつて、毎朝のラジオの「和歌の入門講座」を聞いて作歌していた努力にはおどろいた。そして毎朝父のために佛壇に向つて回向している姿が今でも眼に残つている。

が、氣が短かいところもそのまゝ受けついでいる。

母は大阪の難波の眞宗の寺院の娘である。父が伊豫か

私が今日いくらかでも求道の氣持があるとしたら、母親からの感化によるものであると確信している。

ら大阪へ出て日本紡績に入つてから嫁いで來た。明治二

(駒大講師、東京高等保育字校長)

厚生大臣賞に輝く

一箱のキャラメル



杉 本 信 雄

岩手縣花巻市の本宗松庵寺住職小川金英師

(五一)は、宗祖法然上人の御信仰を身を持つて實踐されている妙好人です。小川師は、花巻市の民生委員として活躍、陰に陽に多くの貧困家庭の相談相手となつて、恵まれない人たちに、温かい慈愛の手をさしのべ、自立更生させてきましたが、このほど厚生省が募集した「貧困者の更生事例」に應募した體驗談

「一箱のキャラメルがむだでなかつた」が、六月三十日、見事厚生大臣賞として入選、日頃の業績が實を結んだものと宗門關係者からもよろこばれています。

小川師の示された事例は、同師が幸子夫人(四五)と共に、裸一貫で引揚げ、七轉び八起きして自力で更生しようと、涙ぐましい努力を續ける一家に、市の民生委員として三年間、

慈愛のまなざしと、己を捨てての献身で、遂に希望の灯をともしさせた経過を綴つた手記です。では次に、「一箱のキャラメルがむだでなかつた」の概要を記して、私たちの勵みの一つに致しましょう。

「外地から引揚げてこのかた、何一つ良いことは無い。何をやつてみても駄目だ。全く馬鹿をみた。」

上川氏は折にふれ、口ぐせにこういうのである。上川氏は満州である會社に勤め、何不自由なく暮してきたが、引揚げてからの上川昌藏(四三)は、妻萬智子(二六)長男昌一(二三)二男征二(一一)三男剛(九つ)四男賢(六つ)の妻子五人をかかえ、あせる心は、押えようもなかつた。あれやこれやと仕事、商賣に手を出したが、ことごとくに失敗した。それは山つ氣の故であつたが、失敗を重ねる度に負債を多くしていつた。その結果として賣食いの生活は、どん底となつてしまつた。通例にもれず上川氏は、全く働く意欲を失つてしまい、布團をかぶつて寝るのみの生活となつてしまつた。

私はある日、この悲惨な一家を訪ねた。六

軒長屋の左から三軒目で、九尺一間の住居。

家具はと見ればなに一つなく、ボロ服が一着と學用品が二、三點だけ、賣食いも底を突いてしまったのだ。私の來訪に上川氏は、かぶつていた布團をはねのけて座り直した。私は用意してきた五つのキャラメルを一箱ずつ子供たちにやつた。お腹をすかしていた子供たちは大喜びで外に遊びに出た。

そこで私は上川氏夫婦を前に、來訪の意圖を告げ、親しく話し出した。しかし上川夫婦の口をつく言葉は、ただ自分をのろい「社會が悪いからだ」という救いがたい言葉の連続だった。私は「これはどうしようもない」と中ば諦めかかったが、「ここで捨てては」と闘志を燃やしポケットからもう一つのキャラメルを出して、夫婦にすすめた。しかし二人とも食べようとしない。そこで私は、まず心を和らげることだと、冗談を言いながら一粒のキャラメルを口にしたら。「さあ、どうぞ」数回にわたつてすすめた効か、やつとのことで妻私萬智子さんは「では遠慮なしに……」と口にした。夫の川上氏もつらねて、一粒を口へもつて行きながら、ボツリ、ボツリと重

い口を開きはじめた。「一體こんなふうに困るのは、萬智子が悪いんだ」「おれが働いても、萬智子は協力するどころか、ブチこわしばつかりして」という。妻はまた妻で、夫がいけないのだと、口ぎたなくのしる。しかし、その言葉には先程まで全く見られなかった、明かるいものを確かに含んでいた。自暴自棄だったのが、一粒のキャラメルで、話が好轉してきたように感じられた。私はこのチャンスだと思つた。「あなた方は、やろうとする氣持はあるんですね」「働くことが第一です。ほかに、あなた方のような人は、一ぱいいますよ。氣を引きたて、働くことです。」と、今まで多くの人と共に歩み、少しでもよい生活に導いてきた例を淳々と説いた。すると、夫婦は「私たちだつて、働きたい。もつと張りのある生活をしたい」とうなずいてくれた。

そこで三日目に職業安定所の協力を得て、上川氏をある木材店に就職させた。また妻の萬智子さんには、お針の賃仕事を與えてやつた。この事では私の妻も四方八方にとび、奔走してくれた。夫婦の収入は五千五百圓ばかり

りになつた。しかし、どうしたことか十カ月も経つたころ、上川氏は木材店を解雇されてしまった。理由を調べると無斷でしばしば店を休むためだという。夜遅い妻に代つて朝の炊事、子供の面倒をみると、出勤時間に遅れるので、つい休むようになるという。だがそればかりではなかつた。生活にゆとりができたので、夫婦で遊び歩いていたのだ。私は自分の不覺に涙を流した。上川氏はまた布團をかぶる生活をはじめた。一家は灯を消されたようになつた。私も凡人、ここまで導いた、並々ならぬ苦心にくじけかけた。それを勵まして呉れたのは私の妻だつた。この一家には昨日に變る新しい生活がまたはじまつた。生活保護もすすんで退した。子供たちは毎月新刊の雑誌を手に入れしそつた。

小川師は、厚生大臣賞を手し、その喜びを「宗教家、民生委員として當然やるべきことをやり、それを文章にしたままです。人を愛するものは、人またこれを愛するといふわけです。人をどこまでも慈悲の氣持ちで救つていくつもりです。それは宗祖法然上人の御遺訓を身を以つて實行するだけです。」と語つて呉れました。

もののふの

権化

ごん

け



泉 湛 田 鶴

註、吾妻鏡によると、重忠は、樽尾の明惠を尋ねたとしてゐるが、辻善之助博士は、これは種々なる點で疑問とされてゐる。

明惠は、華嚴の大德で摧邪輪を著して淨土宗と眞向から排撃した人であつて、殊に聞法した建久六年頃は未だ二十三才の修行最中の青年僧であり、その上、その年は、彼が郷里紀州に歸つて幽捷した年である。それ故、辻博士は、重忠が明惠に聞法したとしたのは、吾妻鏡の編者の思ひ違ひであつて、法然上人でなければならぬと主張されてゐる。

(辻博士著 日本文化史 日本佛教史 参照)

建久六年、東大寺供養に臨むために、頼朝夫妻が上洛した時、畠山重忠も従ふて上洛した。

供養の式も盛大に終つた四月五日、重忠は吉水の庵に法然上人を訪れて、淨土の法門を談じ出離生死の要道をたづねた。

鎌倉幕府下にあつても軍功の特におびた、しい坂東武者の典型のようやうな重忠が、何故上人に聞法したのであらうか、彼も亦、時代に對する一抹の不安と、心に多くの苦悶を

抱いてゐたからであつた。

一

伊勢國沼田御厨は、重忠の所領地であつたが、彼の命じた目代の濫行によつて頼朝の怒りにふれその采邑を削られた上、譴責をうけて千葉新介胤正の邸に預けられ幽居謹慎を命ぜられてゐた。

「重忠召し籠められてから既に七日間を過ぎてゐますのに、この間、寢食共に絶つてしまつて、晝夜默然と端座して一言も發しませぬ。今朝も胤正言葉をつくして食膳をすゝめましたるに、食を取らうとせず、あの元氣な顔色も漸く變じて來てゐる容子でございませぬ。」

既に世上のことは思ひ切つてゐるらしく、あたふた勇士に萬一の事

あつてはと恐れます。早く免許を願ひたいと存じます。」

ひたすら恭順の意を表し、絶食して生命を絶たうとしてゐる凄愴な決意がうかゞはれ、絶食を思ひ止まるやう度々苦言したが聞き入れられず、たゞ默想をこらして、日頃の壯氣に満ちた顔にも、みちがへるやうにげつそりとやつれが見え出して來たので、ゐても立つてもゐられない氣持になつて、どうしてもお許しを乞はねばと、胤正は頼朝に恩免の程を嘆願したのであつた。

心から謹慎してゐる重忠の恭順な態度に、頼朝の心も動いて、彼の罪をゆるされることゝなつた。日頃、重忠の面前では、何人も膝をくずすことが出来なかつた程、君子のやうな謹畏な重忠は、頼朝の恩命に喜んだのは云ふまでもない。

彼は朋輩に、

「主君から邑土を賜つた時には、目代の人物を選ぶことが第一である。適當なる人物がない時には、其の地を拜領してはならぬ。重忠、いさゝか籙直を以て我が身を律してゐたが、今度、不良の人を任じて、自らこの恥辱を招いてしまつた。」

と、自分の不明によつて計らざる災厄を招いて困惑をしたことを、しみじみと述懐したのであつた。

頼朝の恩命によつて本領に復されると、彼は直ちに武藏國へ下向してしまつた。

二

重忠の本領復活を心面白からず思つて、尙も彼を陥れんと策謀したのは、梶原景時であつた。

幕下の殊遇を荷つてゐた景時は、常に欺關陸侮の計を廻らしてゐた。かの義經と頼朝との間隙を生じたのも、景時の讒によるものとして心ある勇士は、景時を惡んでゐた。實際、御家人も、自己の地位を保つためには、景時に阿諛し慫慂を通ぜねばならない程、彼の勢力は偉大であつた。

「重忠重科を犯さないのに幽閉せられた事は、自分の大功を棄損せられたると同然であるといふふらして、武藏國菅谷の館に據つて叛逆を發さんと企てゝあるとの風聞しきりにございます。それのみならず、一族悉く集つて謀議を重ねゐること、殿には、なぜ賢慮を廻されませぬ。」

と、重忠を閔責あるやう、言葉たくみに頼朝に訴へた。

景時の言葉に捨てゝ置けず一大事とばかり、直ちに、小山朝政、

下河邊行平、結城朝光、三浦義澄、和田義盛等の重臣を呼び集めて
「使を遣つて仔細を問ふべきか、それとも直ちに討手を派遣すべきか、いづれを取るべきだ」

と、諮ねた。

おもむろに、口を開いた朝光は、

「さきに重忠、同代の不始末によつて暫く譴責になつたる時、たゞ自分の咎と定めて何等幕下を怨むことがありませぬ。人も知る如く彼は天資忠直、神佛を敬い義を慕ひ決して異聞をいだくものにございませぬ。謀叛のことはきつとひがことであらうと存じまする。よろしく使を遣つて、彼の意を聞き召さるが至當と考へまする」

重忠の人柄を熟知してゐる彼は、重忠を辯護してかう進言した。

「朝光どの、意見、尤もと存じまする」

他の面々もこれに讃意を表した。

頼朝は、重忠と弓馬の友である下河邊行平をかへり見て、

「早く行つて重忠の所存を尋ねて見よ。異心なければ、つれて参れ」

と命じた。

「かしこまつて候」

と、其の翌日早曉、行平は友の身を案じつゝ馬に鞭つて武藏國へと急いだ。

三

行平から事の仔細を聞くと、意外の誤解に重忠の顔色はサツと變つた。

「何の恨みあつて多年の勳功を抛つてまで謀叛を企て申せうや。さやうな輕薄な存念はいさゝかもござらぬ。赤心公に奉ずるは幕下の知らるゝところ、讒者の口のために陥られて自ら明らかにするに由なく、今貴殿が命を含んで差し遣はさるゝは、我を謀つて誅せんと欲するためでござらう。末代の今に生れて、この事を聞くは、全く自分の業果を恥づるものでござる」

と、いひ終るや、簾直な重忠は、心の傷けられたと肚を決めたものか、身の潔白を明かさうとしたのか、腰刀を抜いてあはや自害せんとした。

驚きあわてた行平は、重忠の手首をしつかりと押へ。

「貴殿は詐を知らぬと自らいはるゝではござらぬか。行平、又誠心をもつて公に供へるも。誅すべきものならば詐り計るものではござらぬ。信義を以て人に接することは、我も他に譲るものではござらぬ。貴殿は將軍の後胤、我も四代將軍の胤なれば、まさに相敵戦して以て雌雄を決せんとするもの、何で詐謀を用ひて貴殿を陥れやうか。朋を選んで異議なく見し参らせんためのお計ひでござる」

と、友情の誠をつくして諭した。

醇憤で紅潮した重忠の顔色も、果々述べる行平の言葉を理解していつしか笑顔に變つて、

「一献 仕らう」

と、酒肴を運ばせ、杯をすゝめ交し、久瀾をよろこび合つて、磊落に歡談して夜を明かした。刻のすぎるのも忘れた。

翌朝二人は駒を並べて鎌倉に歸ると景時に逆心なき旨を陳じた。

「若し誠に叛逆心在さずば、よろしく直ちに起請文を進められよ」

と、腹に一物の景時は、深謀な眸で睥睨するやうに、ぢつと重忠を見守つて迫つた。言葉は穩かであるが威嚇である。

熱湯のやうな憤りを怵へて、

「若し我が武勇を頼んで人の貨財を奪ひとつて清世の計となすといふが如き噂でも立つならば、尤も恥辱とすべきものでござるか、謀叛を企てんと欲する由の風聞あるならば、却つて面目とも申すべきもの。我、源氏の興れるに遭ひ、身を幕府に委ね、未だ曾て二心を抱かざるに、讒訴のかゝる、實に不幸の至り、我が運の縮まるところでござる。我が赤心の如きは幕下の知らるゝところ、本より心と言葉と異なるものではござらぬから、起請文など進め難く存ずる。速にこの旨を披露されよ」

良心に何の傷むところのなかつた重忠は、景時の權威に何等屈することもなく、堂々と武者の誇を持して所信を述べて、起請文を書くことを肯じなかつた。

その頃、謀叛心ありと見られることは重大な事であつた。討手をさし向けられるか、領地を沒收となるかであつた。

陳辯をつくすと思ひの外、重忠の剛毅な態度に、いさゝか狼狽氣味の景時は、これ以上強制出來ず、この旨を頼朝に言上した。

やがて召によつて、行平は重忠を伴つて頼朝の前に出た。

糺問にあふと思つてゐたところ、重忠の心を知つてゐて何の疑惑を抱かなかつた頼朝は、そのことにいさゝかも言及せず、愉快げに

世上の難事を談ずるのみであつた。それのみか、重忠を相見した功を賞で、行平に劔を賜つたのであつた。

「あゝ、あのことは忘れもせぬ、文治三年のこと、もう何年前の事だ」と、重忠は、回想してゐた。

四

この頃では重忠は、武者の道といふものについて懷疑的にならざるを得なくなつてゐた。

幕府は建てられたといふに、家中の葛藤はつきない。

何故、人間は權力をのみ求めてかうも争ふのであらう。頼朝も義經との兄弟の間に於ての確執、骨肉相争ふと云ふ淺ましい相剋は、天性廉直な彼には、そんなことはあり得ることでない、なげかはしいことゝ思はれるのであつた。

頼朝が義仲を討つた時には、義經に従つて宇治で戦ひ、一の谷では景時に指揮されることを避けて義經に従つて戦ひ、その人柄を十分知りもし、信頼もした武將なのである。その義經は、頼朝に追はれ追はれて、終に奥州藤原氏に身を潜めてしまつた。

文治五年四月二十日、義經は衣河の館に於て、泰衡の率いる數百騎に不意に攻め撃たれ、一代の戰略家も三十一才を一期として、辨慶と共に、あへなくみちのくの露と消えてしまつた。

越えて六月二十六日には、泰衡は、父秀衡が最も愛し奥州に勇名を轟かしてゐた弟の泉三郎忠衡を誅してしまつた。

「義經をあくまで擁戴せよ」

と。死に臨んでの父の遺命を忠實に守つて義經につかへること頗

る慇懃であつたからであつた。

一家の安泰を圖らうと企てた泰衡は、義經の首級を擧げて頼朝に忠誠をつくしたつもりであつたが、かねてから奥州征伐の志があつた頼朝は、追對の宣旨を賜つて、七月十九日奥州征途に登つた。

先陣は、相變らず重忠が命ぜられた。彼は、

「我天下を平げるまで、つねに我が先驅たれ」

と、かねて頼朝から賜つた小紋の藍皮一張を旗上に著けて國見澤に陣した。

奥州平泉の一角でゆるぎなき勢力を占め、文化と平和の夢圓やかであつた藤原氏は、數萬の大軍を擁して迎へ討つたが、源氏の軍に抗しきれず崩れ潰えてしまつた。庶兄、國衡は和田義盛の矢に當つて倒れ、重忠の郎黨大串次郎に討たれてしまつた。泰衡は身をもつて深山へ逃れ、蝦夷へ走らうとして家重代の家臣、河田次郎を恃まんと、肥田郡贊棚に至つたところ、河田は却つて手勢を率いて泰衡を圍んで遂に首を擧げてしまつた。

河田は泰衡の首級をたづさへて頼朝の陣を訪ねた。義盛と重忠とが首實檢に當つた。

河田は重き恩賞に預るものと思ひの外、頼朝は、(譜代の恩を忘れて主人を討つは、科八庫を招くもの)と憤然と朝光に命じて斬らしてしまつた。その時のことなどが、重忠の胸中に去來して、彼の心を一層暗くした。

五

何故、人はかくも功を擧げるために没義道に陥るのであろうか。

心に何の打算もなく、政略もなく、禮節を重んずる重忠の目には、大きな義憤をさへ抱かずにはゐられなかつた。

勿論、彼とて戰場では武勳を争ふことが、唯一の念願ではあつたが、それでも時には、論巧の場合には、武勳を人に譲るだけの雅量ではあつた。

名を命以上に尊び、單なる武勳や領地の多寡に酔ふてゐる重忠ではなかつた。たゞ「もののふ」の譽のみを考へてゐた典型的な武人であつた。

重忠には、近頃では、熊谷直實が法然上人に聞法して出家したといふことが、うべなるかなと思はれて來るのだつた。

「この心の曇を誰によつて晴らして貰へるか」

「法然上人をさし置いて他にあるまい」

とさへ考へて、上人に大きな魅惑を抱いた重忠は、建久六年四月、頼朝に供奉して東大寺の供養が終ると、心の苦悶を解決せんものと吉水の庵室を訪れたのであつた。それは、上人から隱遁の道を聞くためではなかつた。武士として生きるための道を、眞劍にきゝたいからであつた。

「彌陀の本願を信じて、ひたすらに己が道に生きることが、念佛の大道よ」と、説き示され、念佛は生死を解決して、現世に強く生きるにあると聞かされて、ほん然と悟るところがあつた。「念佛とは、一念一念に己の立場にふるい立つことにある」といふ。

單なる武勳を争ふことを越えた「もののふの道」という一路に徹することが、自分の眞に生きる道を知つた重忠は、吉水の庵をふりかへつて、虚空に掌を合せ、喜びの餘り、

「南無阿彌陀佛」

と、高らかに叫んだ。それは又、「もののふの權化」ともならんとの重忠の祈りでもあつた。

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロポン的病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人讃仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行作法に到るまで明示され
ている。

定價 一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○一足とびに夏かと思えた翌梅雨
は久しぶりで仲々厳しい。本誌も
吉田先生には尙御自愛されるよう
にと私に考えていた所、幸に、巻
頭を飾る玉文を頂いた。毎日の山
崎さんの「人情記者失格す」を讀
んでもらえばわかると思うが、全
く、一字一句、大變な御努力であ
る。原稿を拜見していても、それ
が目に見えるようです。有難い事
です。

○吉田先生の文中の「二條城の清
正」は昨年九月上演豫定が吉右衛
門丈の病と死によりのが本年は
悲しくも、その一週忌追悼公演と
なるようです。

○本誌から、會員各位發送の本誌
に、地域を追ってアンケート式の
葉書を挿入しますから、是非、一
筆お認めの上、御投函下さい。翌
月浄土に誌面の許す限り、掲載致
します。取扱については、編集部
に御一任願います。

○長野の丸山蘭水師、來室。宗教
誌編輯の御苦心等承わる。尙、先
月號の同寺寫眞は師の提供された
もの。

○去る六月下旬、京都で行われた
浄土教學大會は、戦後最も盛大で
特に在洛新進の發表が目立つた由
○本誌發行所の移轉のため、茲の
所、事務が停滯し御迷惑をおかけ
しておりますが、程なく解決しま
す。

○中村康隆氏の幼稚園々舎が七月
三日に落成式を行つた。地元の熱
心な協力もさりながら氏の倦まぬ
福田の開発行も御苦心と思われな
す。

○淨保連の東京例會が、六月三十
日、光明幼稚園(安井眞敬氏)で、

いつも、七、八割の出席で力強い
例會はやがて常に新しい一つの宗
團教化の一面を展こう。七、八月
は休み、九月は新設祐天寺幼稚園
で。因みに、幼稚園等で入校の時
は、詳細な家庭調書が作成される
が、壊家簿(先亡を含む)のある
お寺が少いのでなからうか。大方
は住職等の頭の中。

○六月號の「信仰に輝く人々」は
多數の方から好評の聲。一人でも
多くこうした方々を紹介したい。

本誌も毎日の杉本信雄氏より。

○お忙しい所、佛大の恵谷先生、
内山憲尙先生、山田巖雄先生より
御寄稿頂きました。(眞野龍海)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇
圓です。前金切の節は、精算
通知を致しますから、折返し
御送金下さい。御送金は便利
で安全確實な振替を利用して
下さい、千圓まで二五圓の手
数料で且、通信も書けます。
新しい市は必ず縣名を、又、
新規か繼續會員かを明記して
下さい。

「浄土」 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年六月廿五日印刷
昭和三十年七月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹 中 信 常

發行人 佐 藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人讃仰會

振替 東京八二一八七番

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東郡深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘
電話深川(64)五八四八

F. F. D. 特選幻燈機

14,500 圓	マスター S300 100V 300W
24,800	マスター・ルックス 100V 700W 冷却装置付
16,500	エルモ 100V 300W
14,500	ニコレットC型 100V 300W
48,000	デラックス 75V 750W

本會代理取次

會員にかぎり一割引にて、御取次致します。
一報カタログ送ります。(荷造送料 500 圓)

(五月より若干定價が變ります)

銀ブランコ2人乗	¥ 12,000
銀ブランコ3人乗	¥ 14,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓櫓	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き運動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットーで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松
光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。